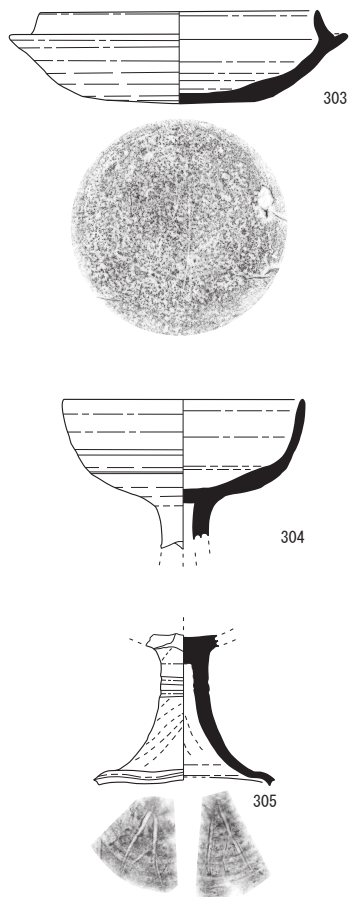
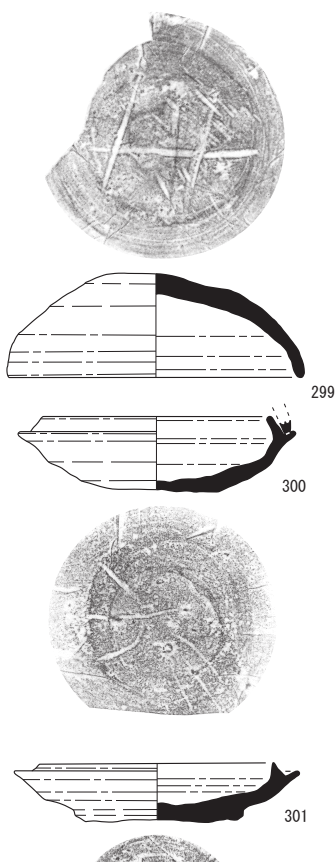
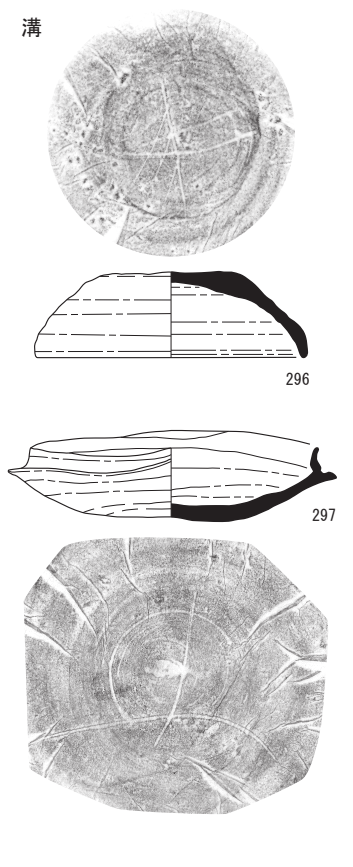
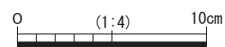
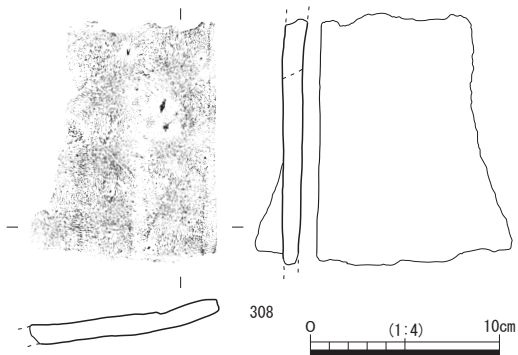
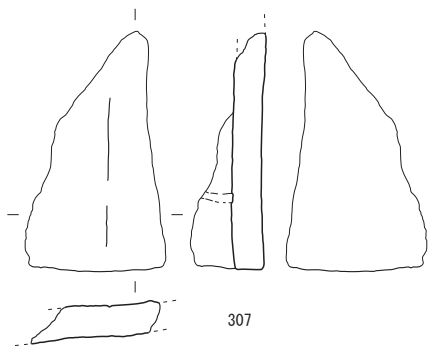
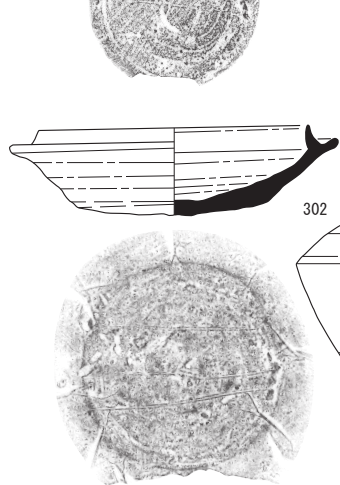
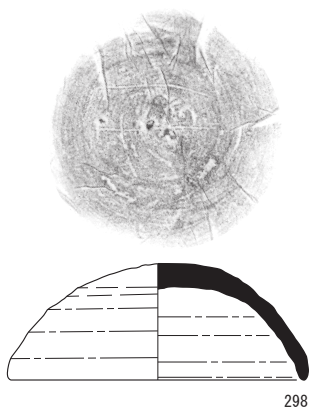


溝

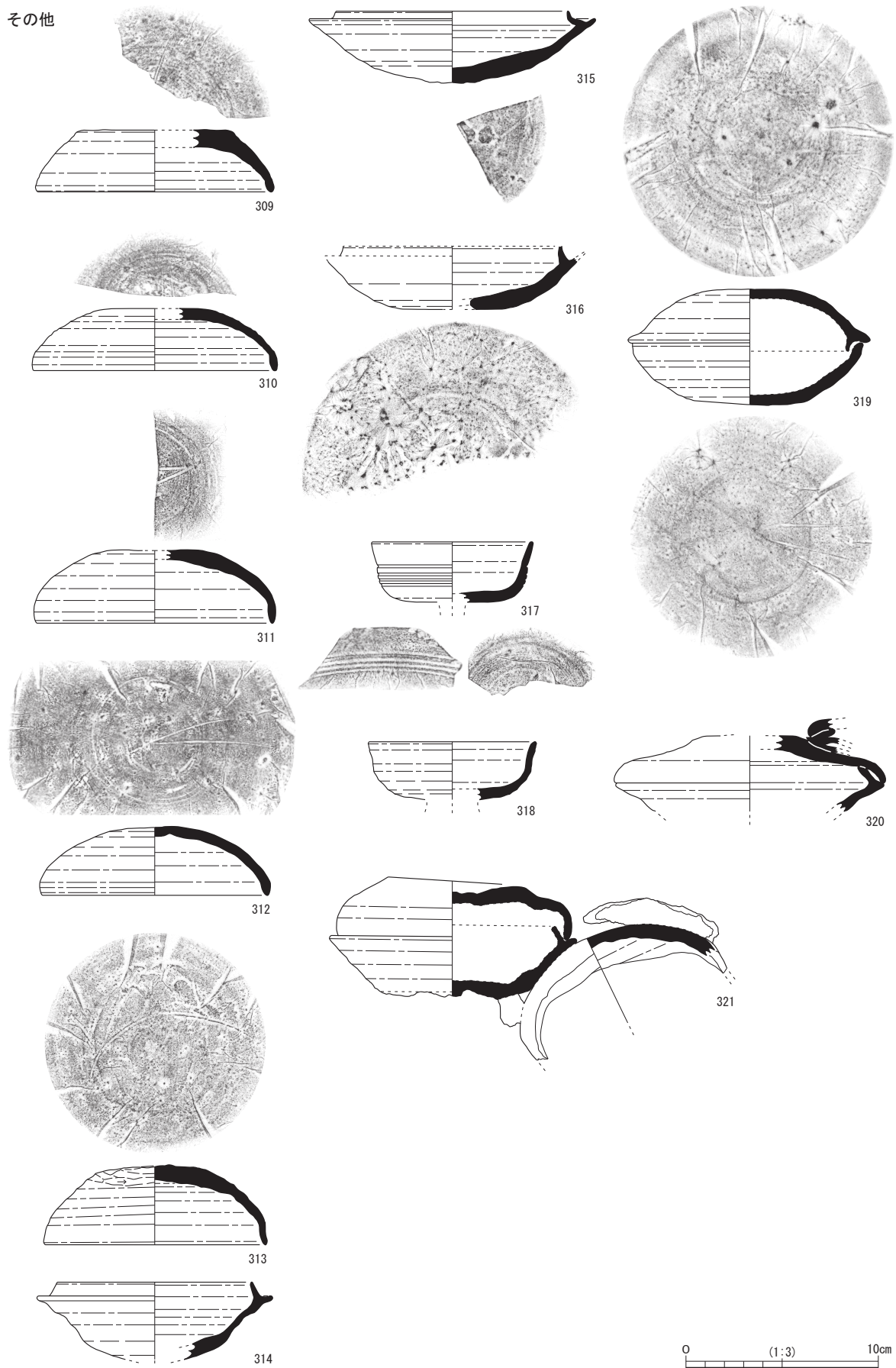


灰原



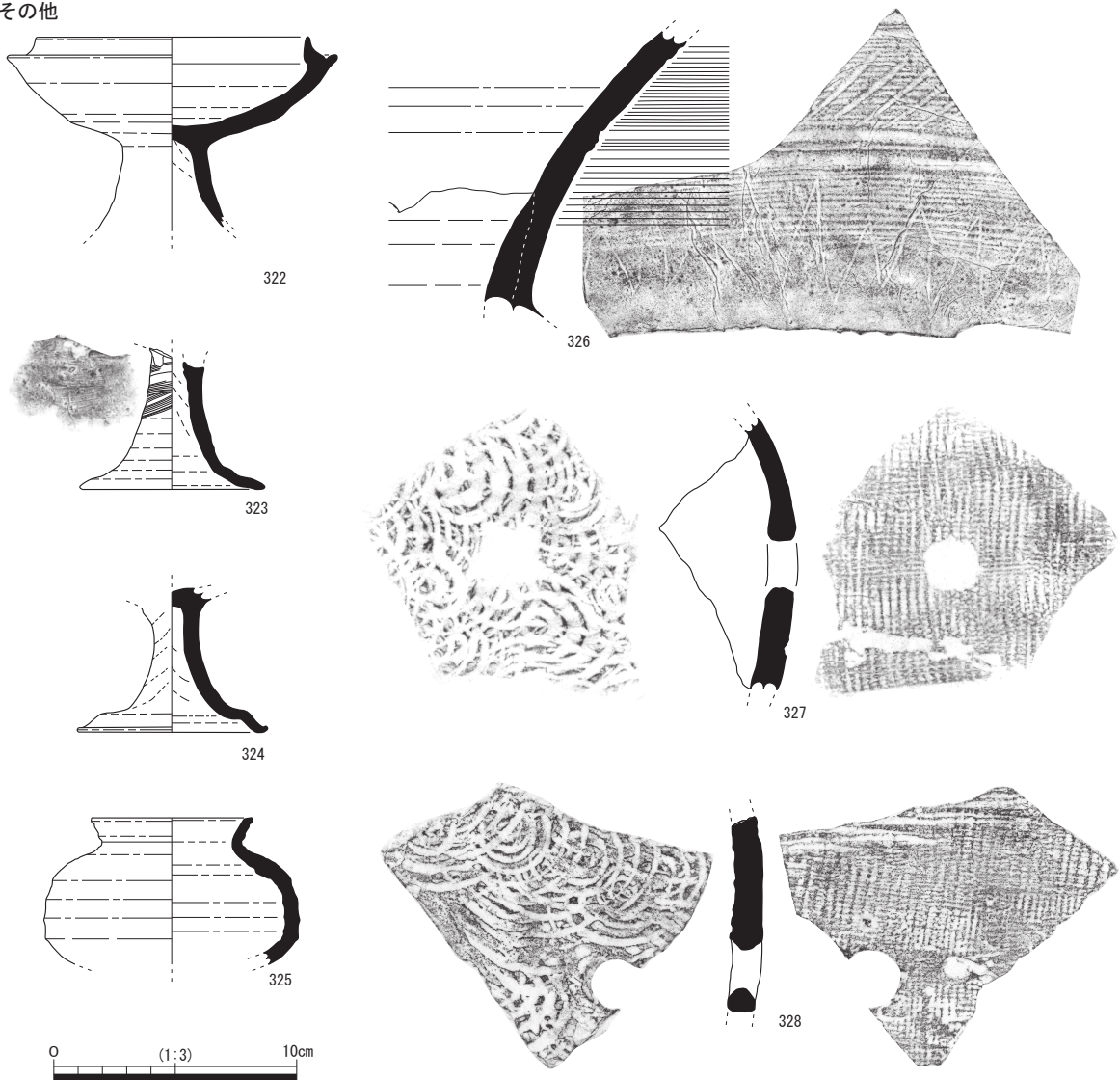
第 45 图 1 号窯跡出土遺物実測图⑩ (1/3 · 1/4)

その他



第46図 1号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

その他



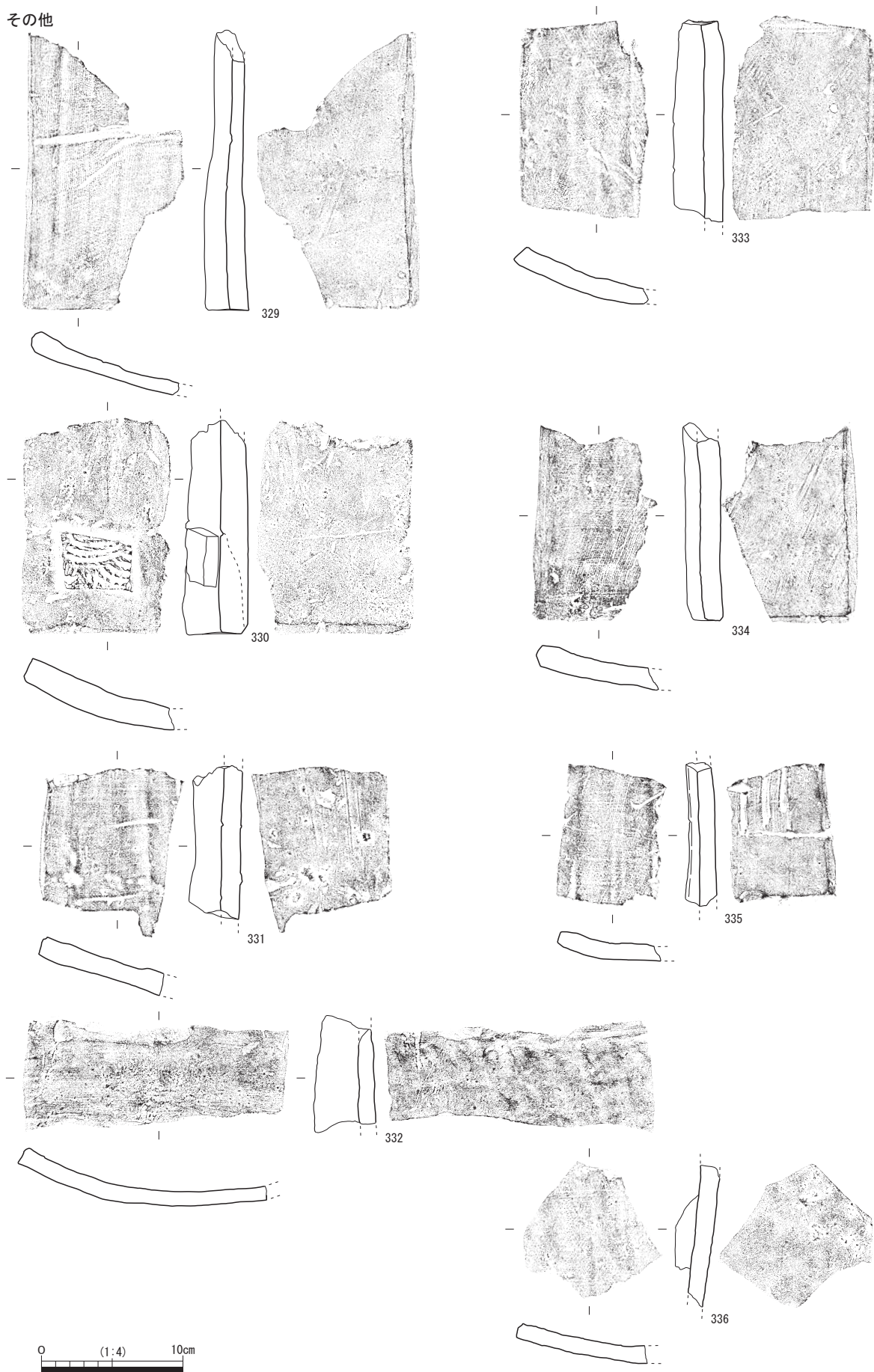
第47図 1号窯跡出土遺物実測図⑫ (1/3)

**(3) 小結**

1号窯は全長8.9mの地下式窖窯である。平面寸胴形で、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。焼成部および煙道部の一部に天井部を確認している。

窯体内から出土した須恵器は、杯Hが主体を占め、蓋の口径12cm前後、身の口径10cm前後で、一部ヘラケズリを施さないものも確認した。また、丸瓦1点と多数の平瓦および道具瓦などの初期瓦が出土している。これらは、二次焼成を受けたものや溶着資料もあることから、一部は焼き台として使用したことが伺われる。1号窯は瓦陶兼業窯として使用され、蓋杯の様相や短脚高杯の存在からその操業時期はIV B期に位置付けられる。

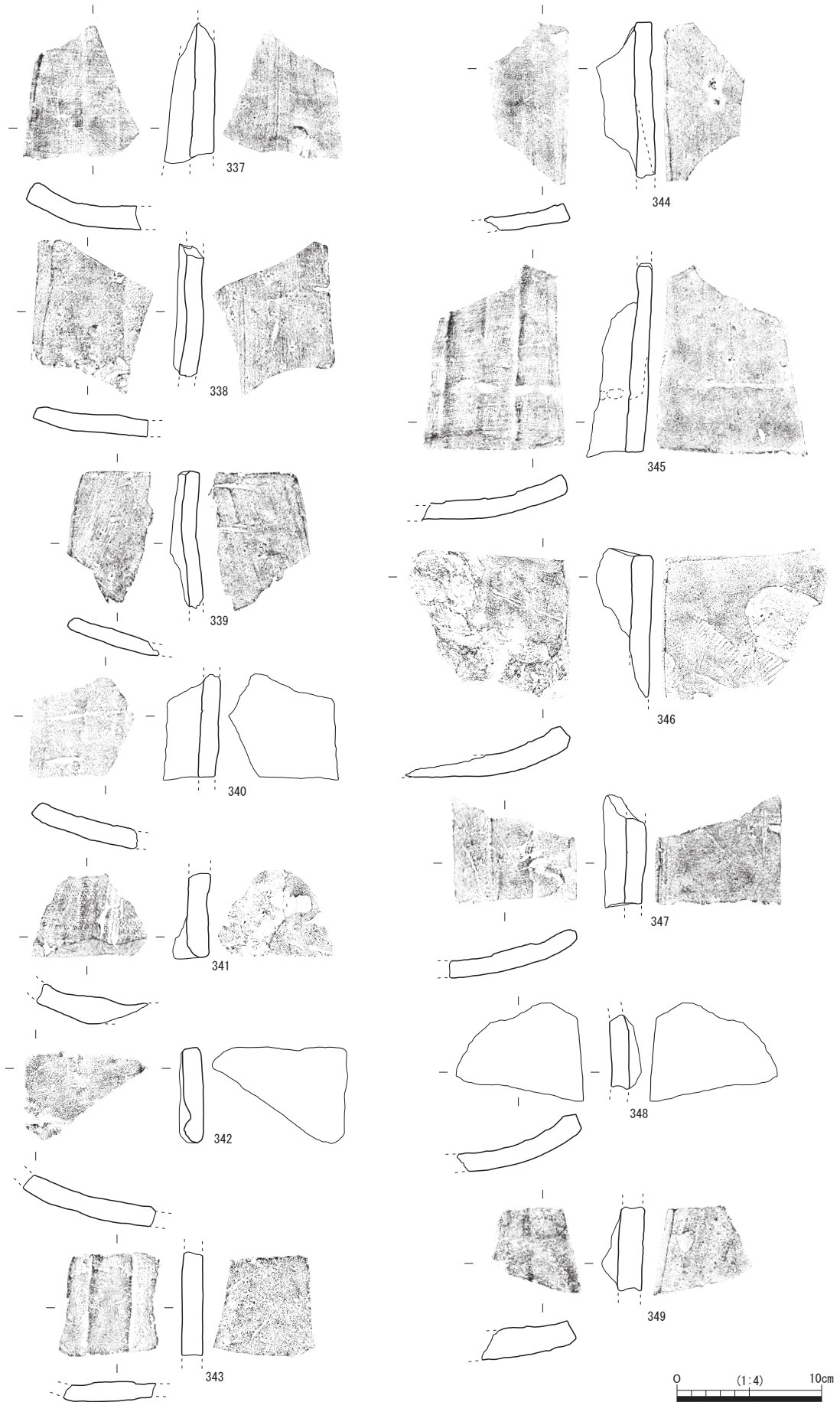
その他



第 48 図 1 号窯跡出土遺物実測図⑬ (1/4)

その他

大谷窯跡群



第 49 図 1 号窯跡出土遺物実測図⑭ (1/4)

### 3. 2号窯跡

#### (1) 窯の構造 (第50図、図版21・22・26～28)

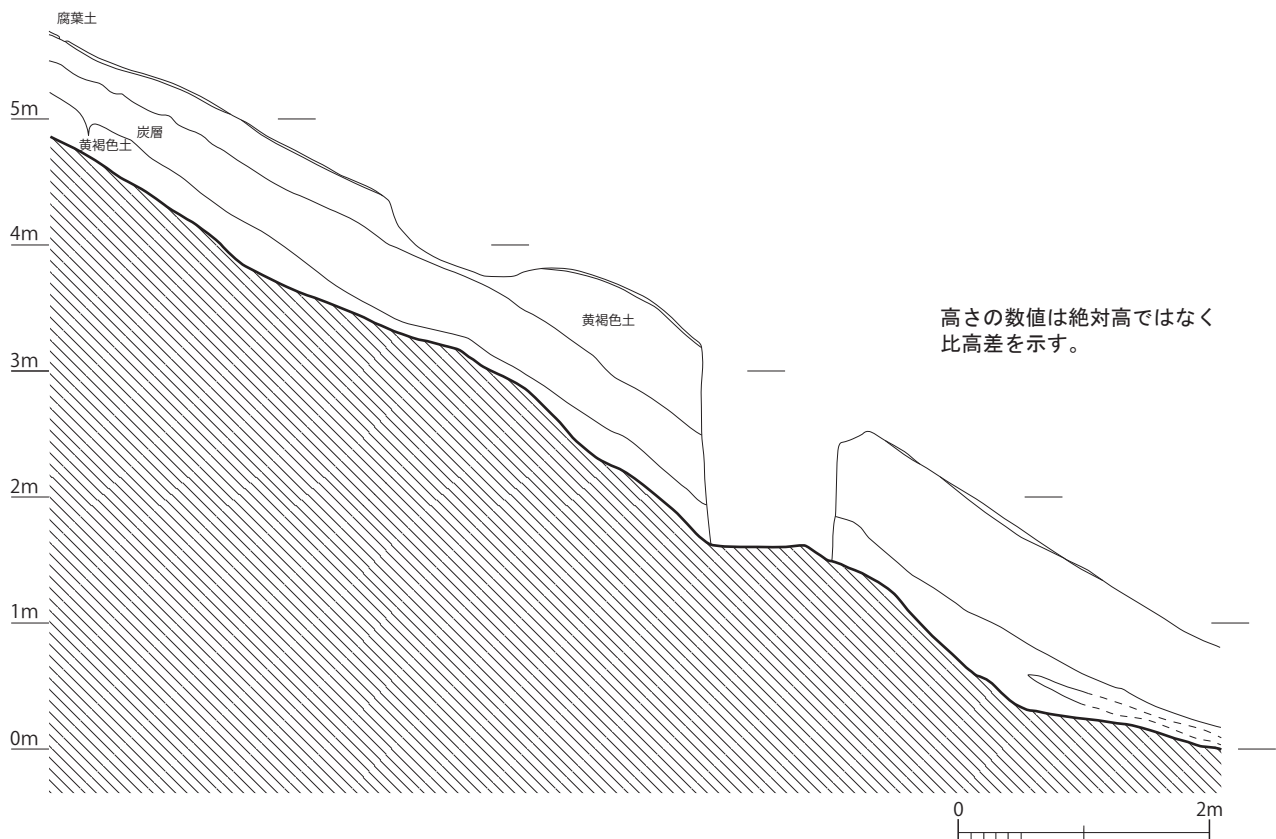
1号窯の南に接するように構築する。窯跡配置図・灰原土層図以外に図面がないため、詳細は不明な点が多い。地下式の窖窯である。灰原から煙道部まで確認し、水平長約12m以上を検出した。全体の規模・構造は1号窯と良く似る。窯尻部・焚口部ではほとんど絞り込みはなく、平面寸胴プランを呈する。煙道部の一部には天井部が遺存し、3つの排煙口からなる多孔式煙道窯である。窯の主軸方位はS-59°-Eである。写真のメモでは「1次窯底」「2次窯底」とあることから、複数の作業面があった可能性がある。1号窯との切り合い関係は明確ではないが、写真では1号窯の煙道部から続く溝を埋め戻して構築しているように見え、全体図でも2号窯の灰原が1号窯を覆うように表現してあることから、2号窯が後出する可能性がある。

**【焚口部・燃焼部】** 写真で見る限り、床面の傾斜角度はおおむね水平である。焚口部の絞り込みはない。遺物は須恵器杯H、杯Bなどが出土した。

**【焼成部】** 燃焼部と同様の幅で焼成部へと続き、30度程度の傾斜角度が想定される。床面には焼き台と考えられる須恵器の甕片が散在するほか、煙道部付近では焼成前穿孔を施した須恵器蓋杯が外面を上にした状態で複数出土した。1号窯と異なり、階段状の施設は明確ではない。

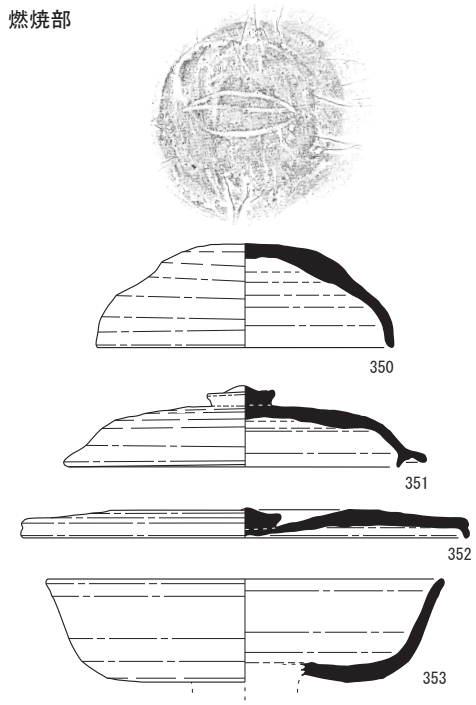
**【煙道部】** 3つの排煙口が横一列に並ぶ多孔式煙道で、一部に天井部が遺存する。

**【溝】** 煙道部の左側に、溝が接続する。左側に1.3mほどのびた後直角に曲がり、1号窯方向に1m

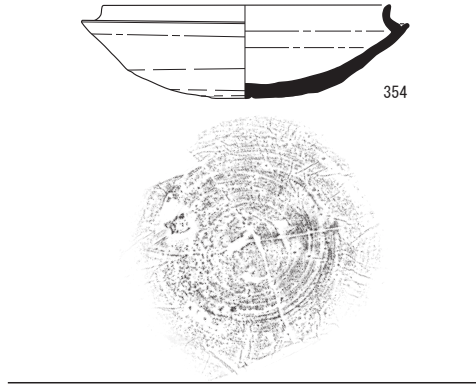


第50図 大谷窯跡群2号窯跡灰原土層実測図 (1/60)

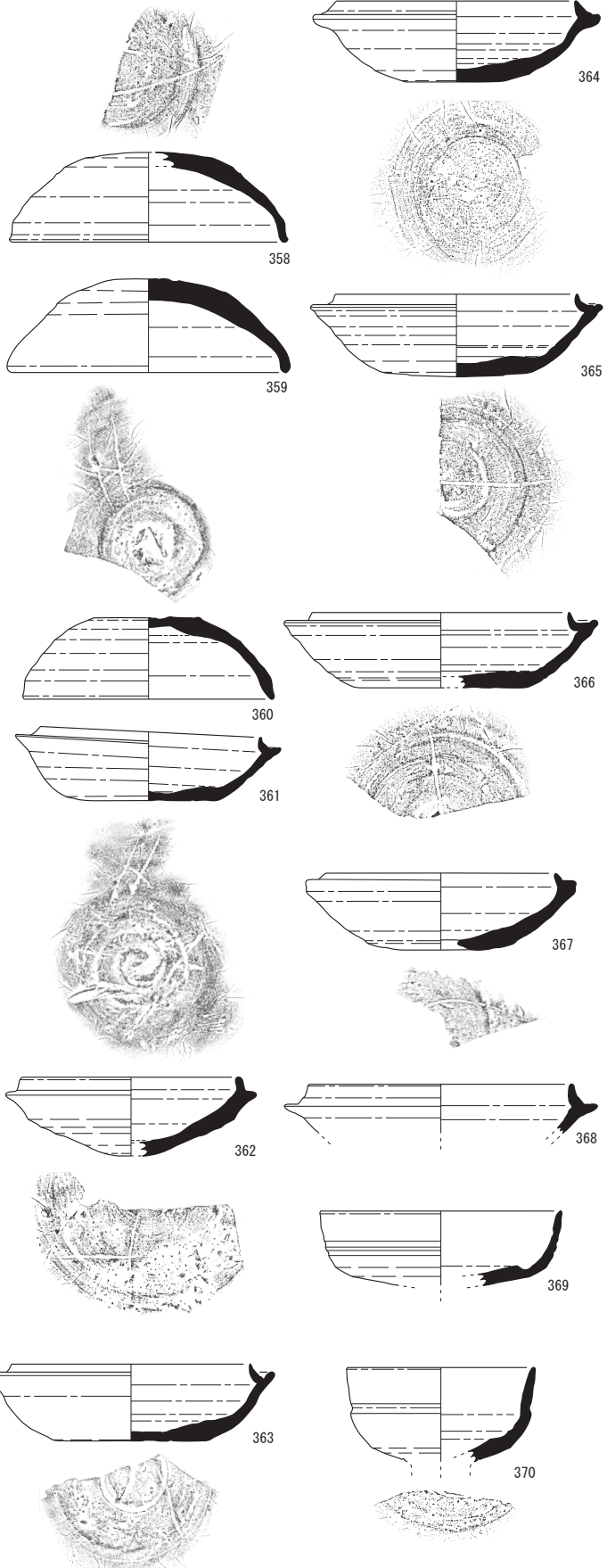
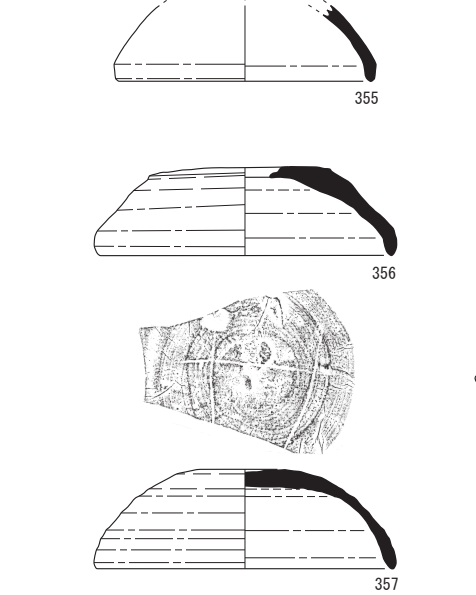
燃烧部



焚口部

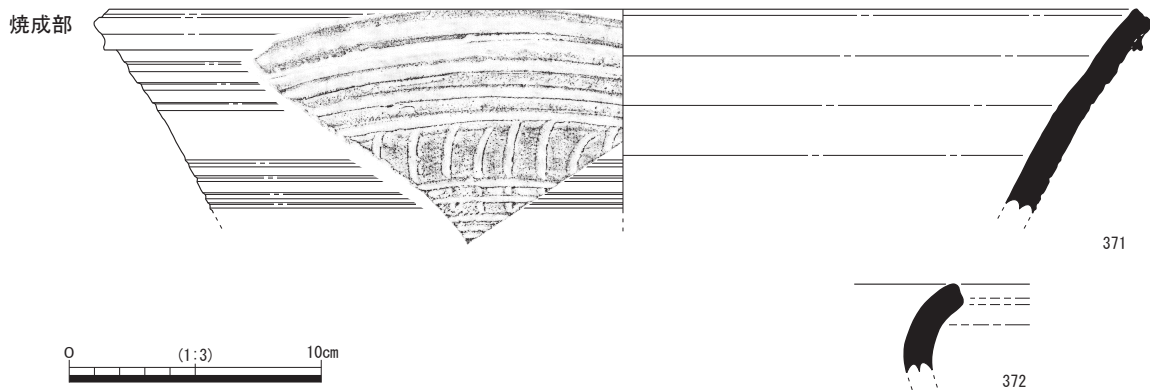


烧成部



0 (1:3) 10cm

第 51 图 2 号窯跡出土遺物実測图① (1/3)



第 52 図 2 号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

ほどのびた後に終息する。

**【灰原】** 長さ 9 m、幅 11 m の範囲に広がる。須恵器蓋杯・高杯・平瓶・すり鉢などが出土した。

## (2) 出土遺物

### 【焼成部 (第 51 図)】

**須恵器 (350 ~ 353)** 350 は杯 H 蓋で、外面にヘラ記号を有し、天井部に手持ちヘラケズリを施す。351・352 は杯 B 蓋で、351 は口縁部にカエリを有し、352 は口縁部が直立する。両者とも天井部に回転ヘラケズリを施し、ボタン状ツマミを有する。353 は高杯杯部で底部は回転ヘラケズリである。

### 【焚口部 (第 51 図)】

**須恵器 (354)** 杯 H 身で、外面にヘラ記号を有し、底部は回転ヘラケズリである。

### 【焼成部 (第 51・52 図)】

**須恵器 (355 ~ 372)** 355 ~ 360 は杯 H 蓋で、357・358・360 は外面にヘラ記号を有する。天井部は 356・360 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。361 ~ 368 は杯 H 身で、368 を除き外面にヘラ記号を有する。底部は 361 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。367 は底部に焼成後穿孔がある。369 は高杯杯部で、外面に沈線が巡る。370 は短脚高杯の杯部で外面にヘラ記号を有する。371・372 は甕で、371 は外面に斜線文を施す。

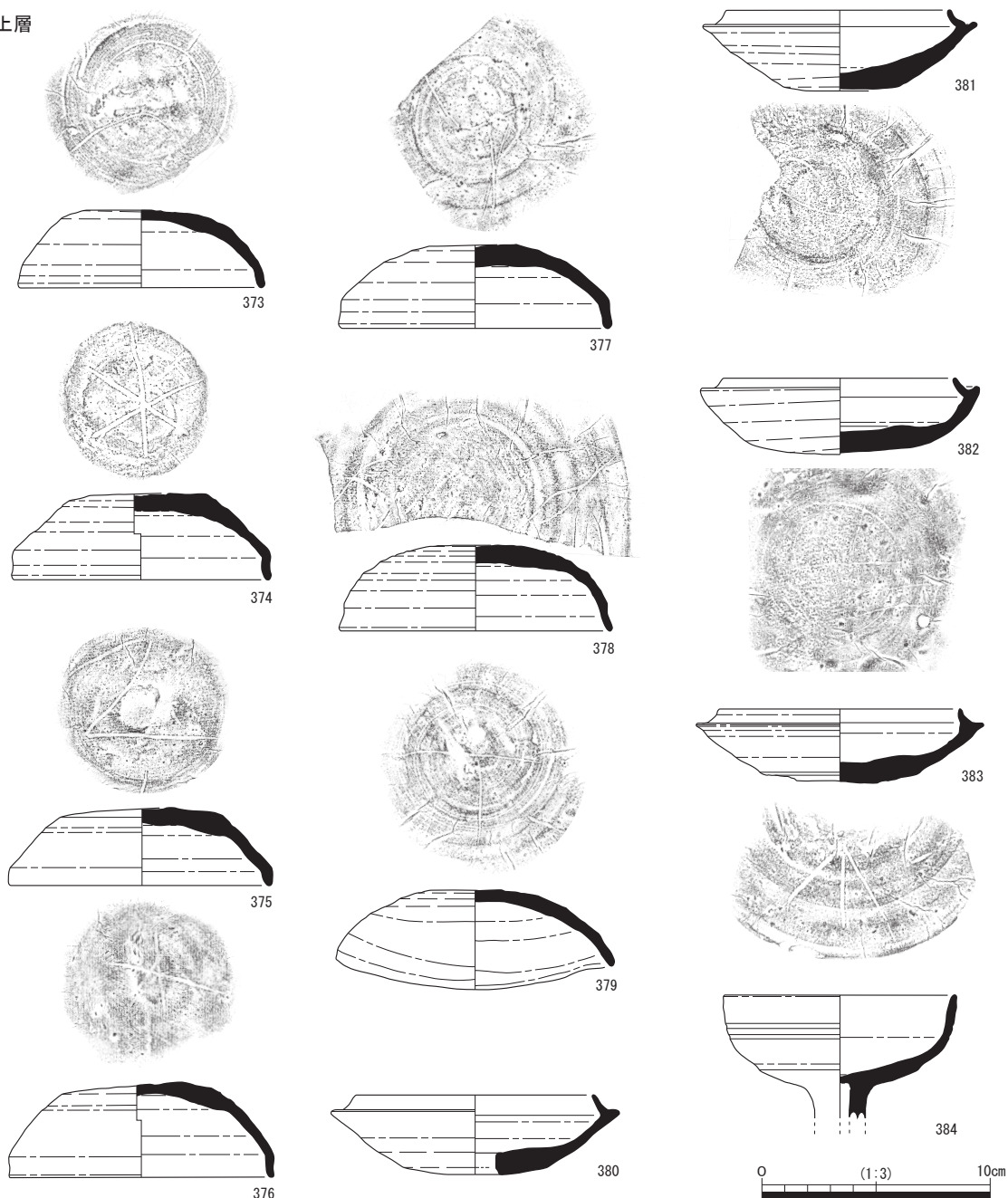
### 【灰原上層 (第 53 図)】

**須恵器 (373 ~ 384)** 373 ~ 379 は杯 H 蓋で、全ての外面にヘラ記号を有する。天井部は 374・376 がヘラ切り、378 が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。380 ~ 383 は杯 H 身で、380 は底部に焼成前穿孔、他は外面にヘラ記号を有する。いずれも底部は回転ヘラケズリである。384 は高杯杯部で、杯部にカキメを施す。

### 【灰原下層 (第 54 ~ 59 図)】

**須恵器 (385 ~ 449)** 385 ~ 400 は杯 H 蓋で、393・398・399 を除き外面にヘラ記号を有し、395 は内面にもヘラ記号状の条線がある。外面は 386・389・397・399 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。394 ~ 400 は天井部に焼成前穿孔を施す。401 ~ 406 は杯 G 蓋である。401・404 はツマミがなく、他はツマミを有する。いずれも天井部は回転ヘラケズリである。407 は天井部にカキメを施す蓋で、高杯に伴うものであろうか。408 は杯 B 蓋で、ボタン状のツマミを有する。409 ~ 423 は杯 H 身で、

灰原上層

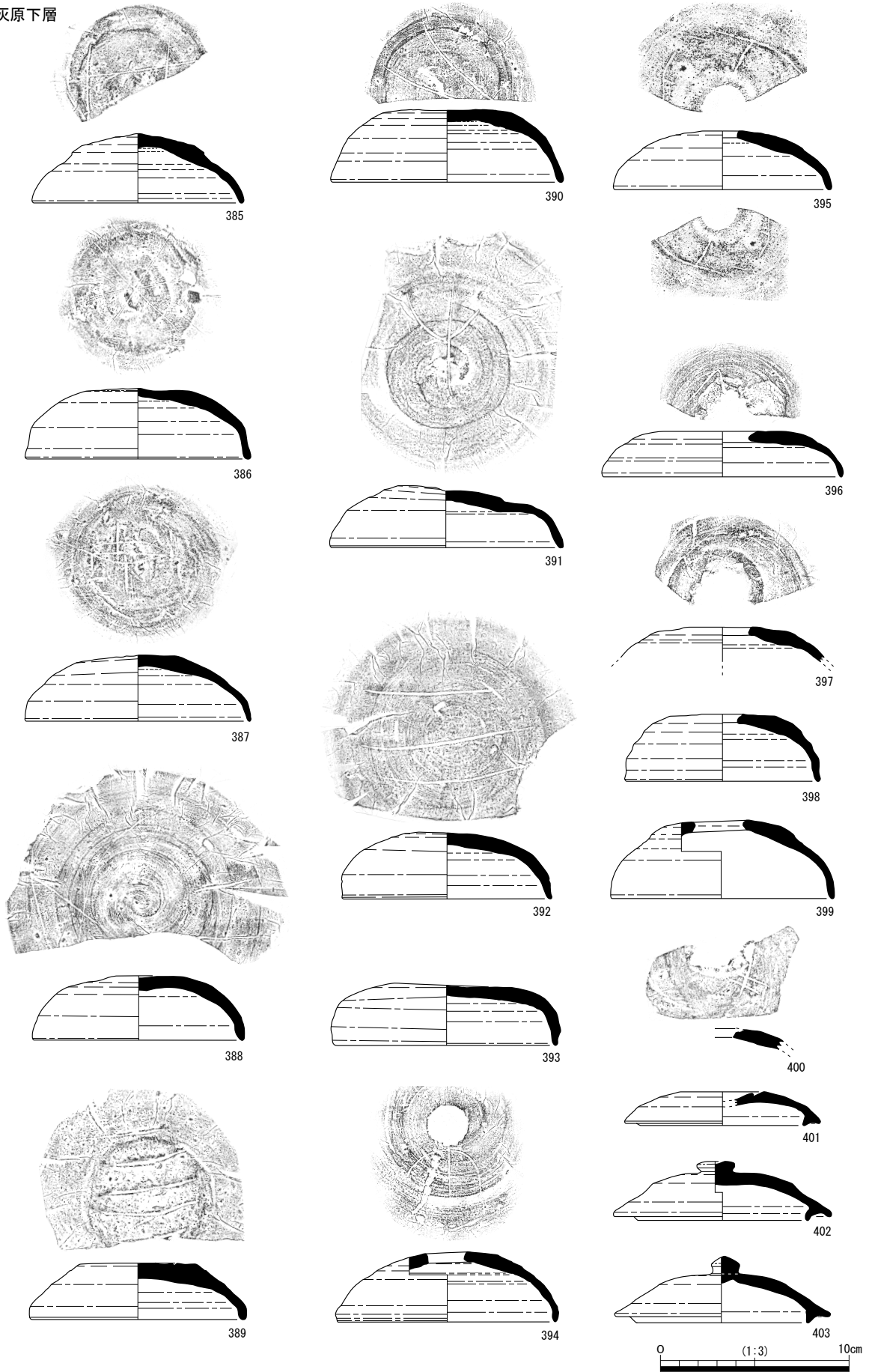


第 53 図 2 号窯跡出土遺物実測図③ (1/3)

423 以外は外面にヘラ記号を有する。底部は 409・420～422 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。415～418 は内面に指頭痕が残り、底部は丸みを帯びる。422 は底部に焼成前穿孔を施す。423 は体部に別個体が付着する。424～427 は杯 G 身で、424 は外面にヘラ記号を有する。底部は 424 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。428～431 は椀である。底部は 428 が手持ちヘラケズリ、429 が回転ヘラケズリ、431 がヘラ切りである。430 は体部に 2 条の凸帯が巡り、体部下半はカキメを施す。432 は鉢で、体部下半にカキメを施す。433 は杯で、外面にヘラ記号を有し、底部は回転ヘラケズリである。434 は高杯脚部で、杯部にカキメを施す。435・436 は壺蓋で、外面にヘラ記号を有する。437 は小型の壺で、底部はヘラ切り、底部側面に回転ヘラケズリを施す。438・439・441 は平瓶で、体部上半にカキメを施す。439・441 は外面にヘラ記号を有する。440・442 は瓶類も

灰原下層

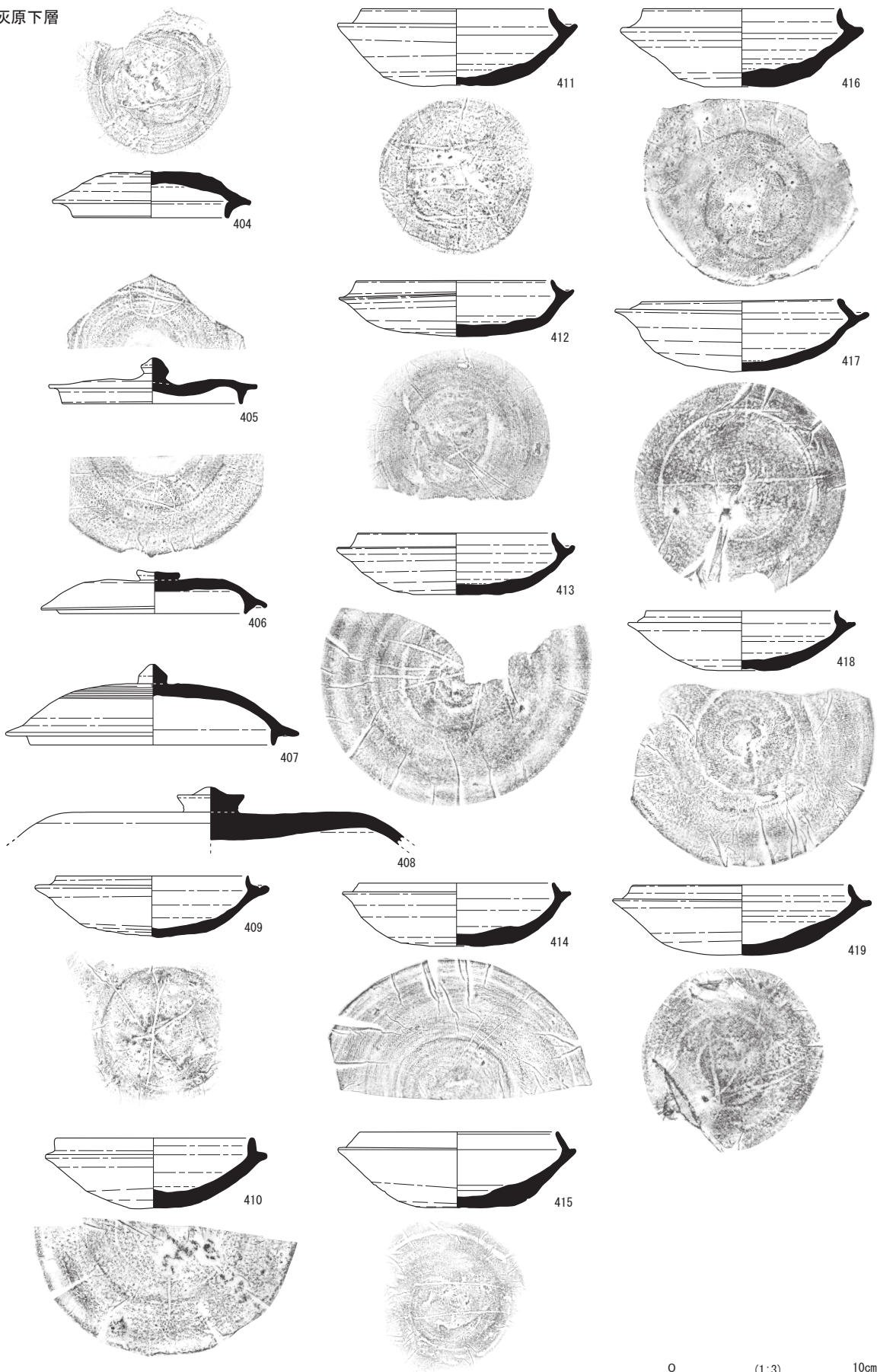
大谷窯跡群



第54图 2号窯跡出土遺物実測图④ (1/3)

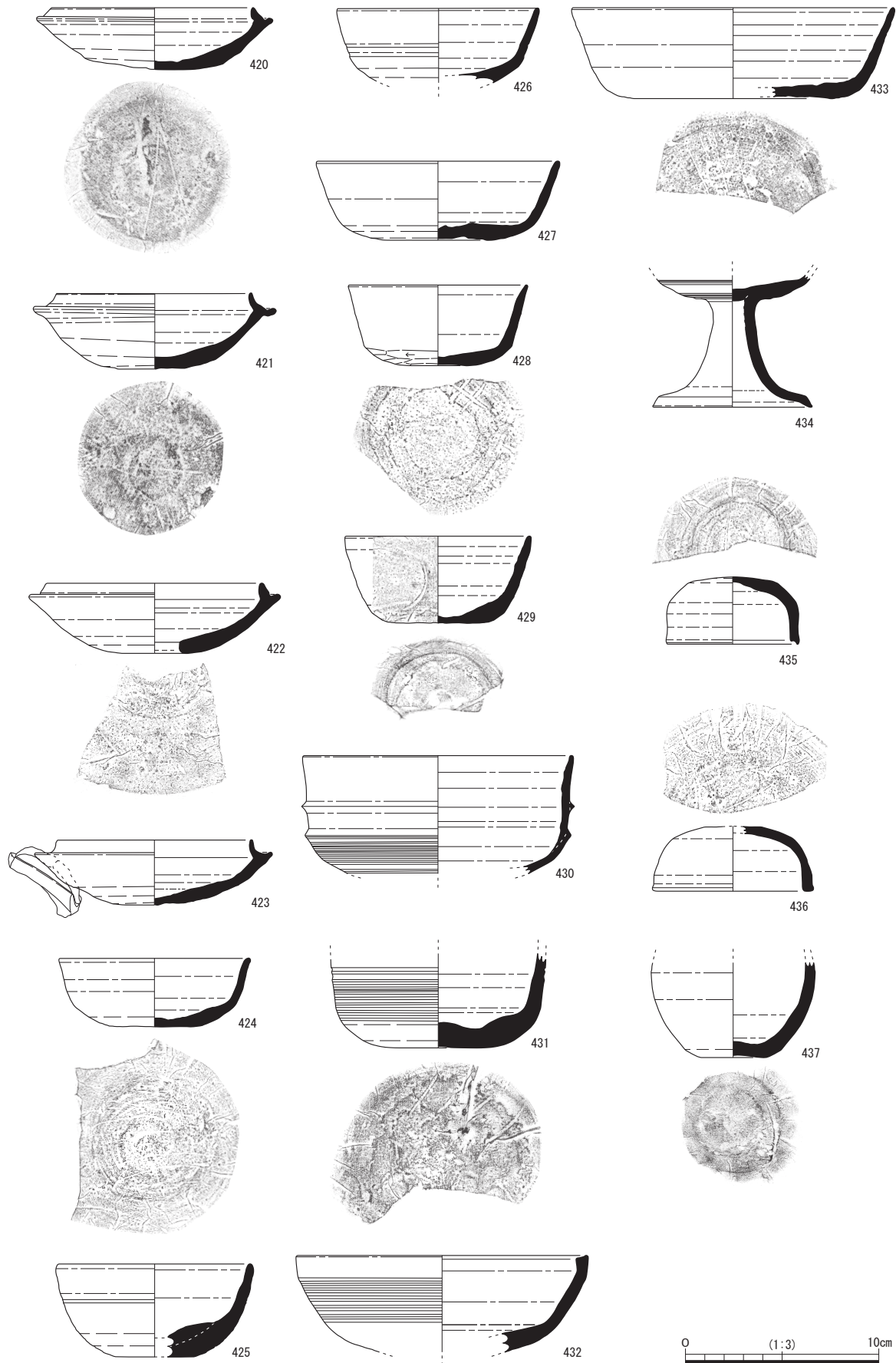
灰原下層

大谷窯跡群



第 55 図 2 号窯跡出土遺物実測図⑤ (1/3)

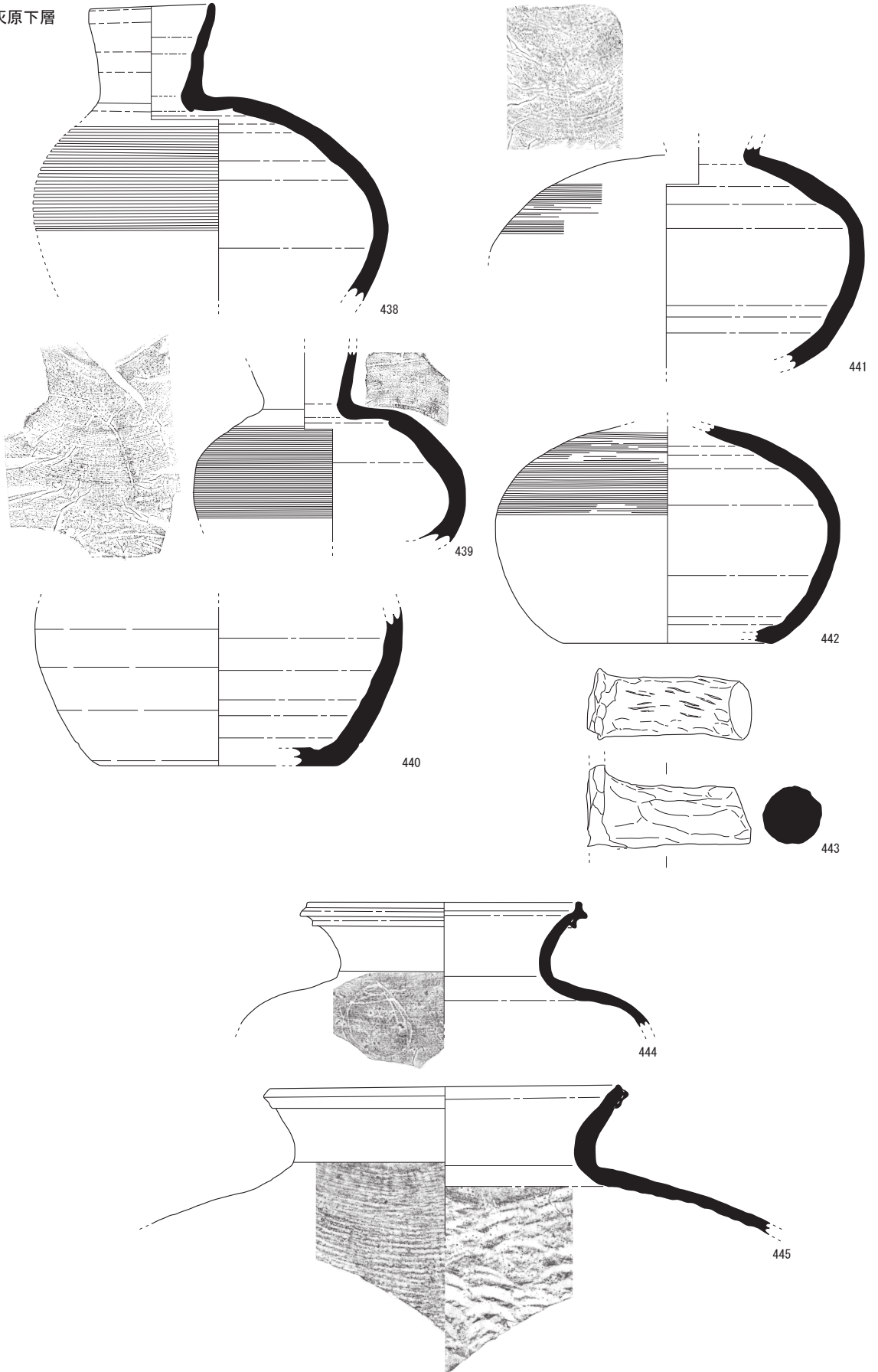
灰原下層



第 56 图 2 号窯跡出土遺物実測図⑥ (1/3)

灰原下層

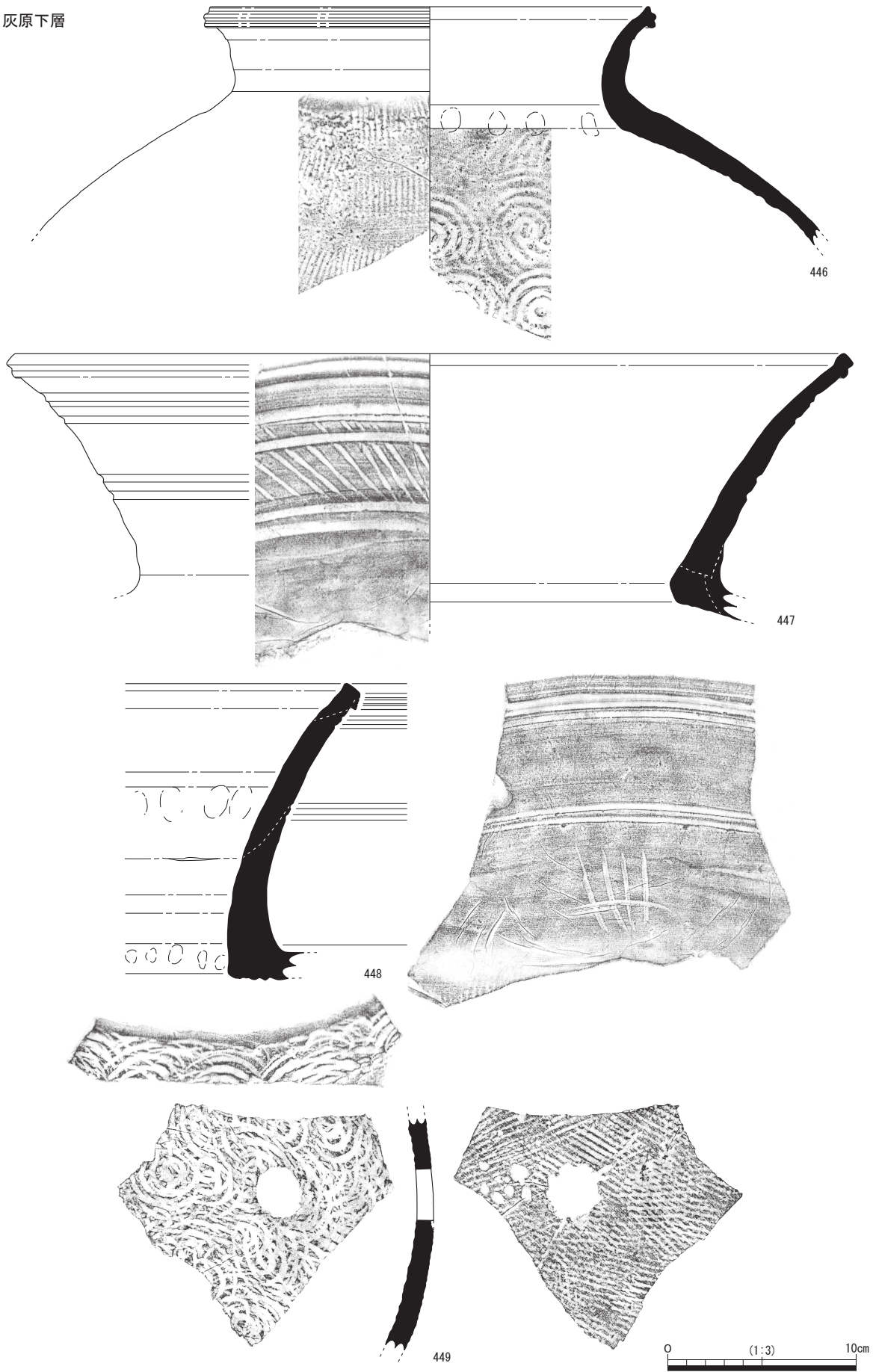
大谷窯跡群



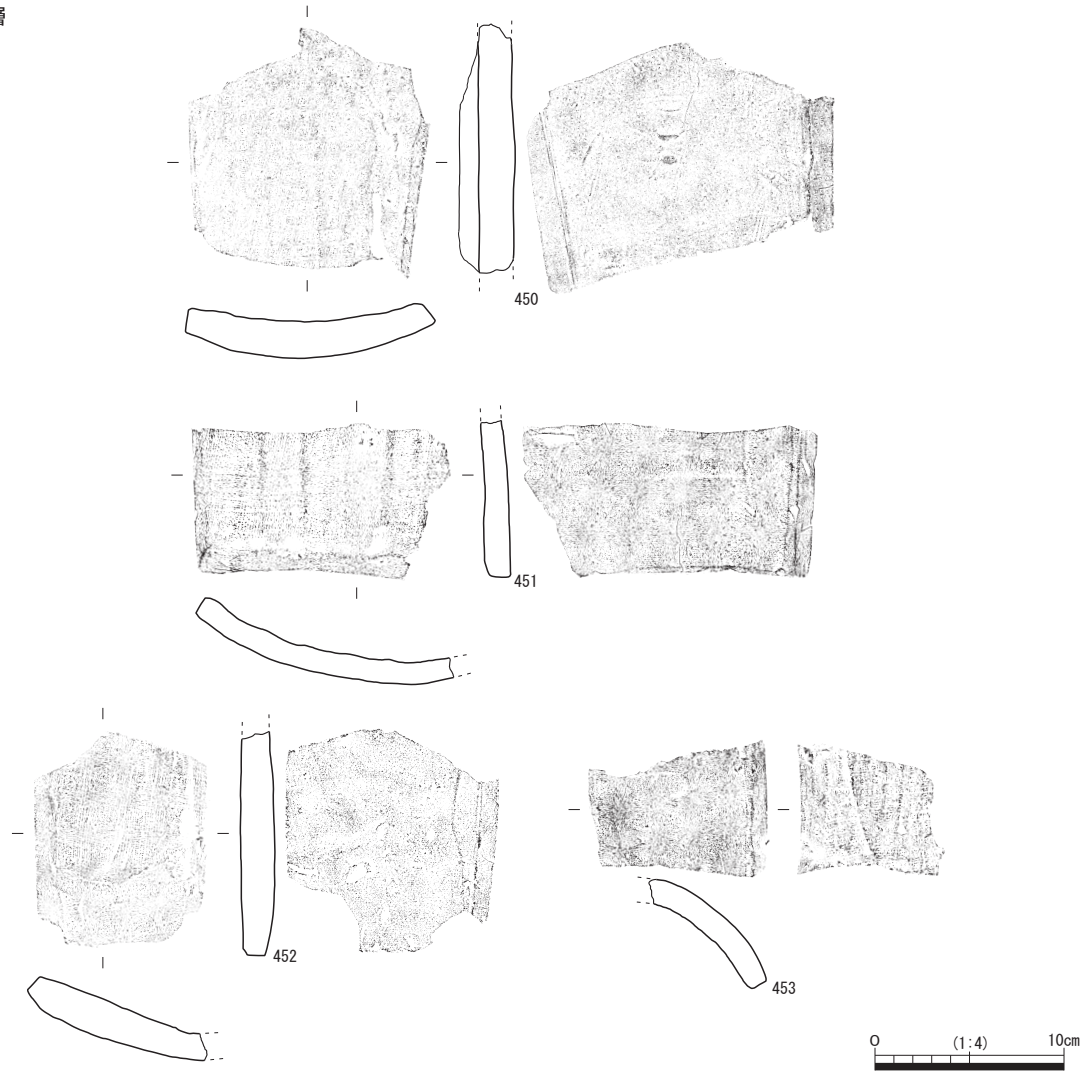
第 57 図 2 号窯跡出土遺物実測図⑦ (1/3)

灰原下層

大谷窯跡群



第58图 2号窯跡出土遺物実測图⑧ (1/3)



第 59 図 2 号窯跡出土遺物実測図⑨ (1/4)

しくは直口の壺で、いずれも平底を呈する。442 は体部上半にカキメ、下半に回転ヘラケズリを施す。443 は甌もしくは鍋の把手である。差し込み技法で体部と接合する。表面は工具ナデ・ナデで、把手先端部を削り落とす。焼成は瓦質である。444～449 は甕である。444 は内外面が回転ナデで、頸部に平行タタキが残る。頸部外面にはヘラ記号状の痕跡がある。445 は体部外面に平行タタキ後カキメ、内面には同心円当具痕が残る。446 は体部外面に擬格子タタキ、内面には同心円当具痕が残る。447 は頸部外面に斜線文を施し、448 はヘラ記号を有する。449 は焼成前穿孔を施す体部片である。

**瓦 (450～453)** 450～452 は平瓦で、焼成は良好で灰色を呈する。側縁部と端部は面取りを行う。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残る、450 は凸面に平行タタキ、452 は凹面に模骨の紐の痕跡が残る。453 は丸瓦で、凹面に模骨痕・布目痕が残る。凸面はナデである。

**【灰原 (第 60～72 図)】**

**須恵器 (454～571)** 454～484 は杯H蓋である。454～470・474～476 は外面にヘラ記号、477～482 は外面に竹管文を施す。天井部は 455・462 が手持ちヘラケズリ、461・465・469・475 がヘラ切